





第9章

エラブユリに賭けた人びと

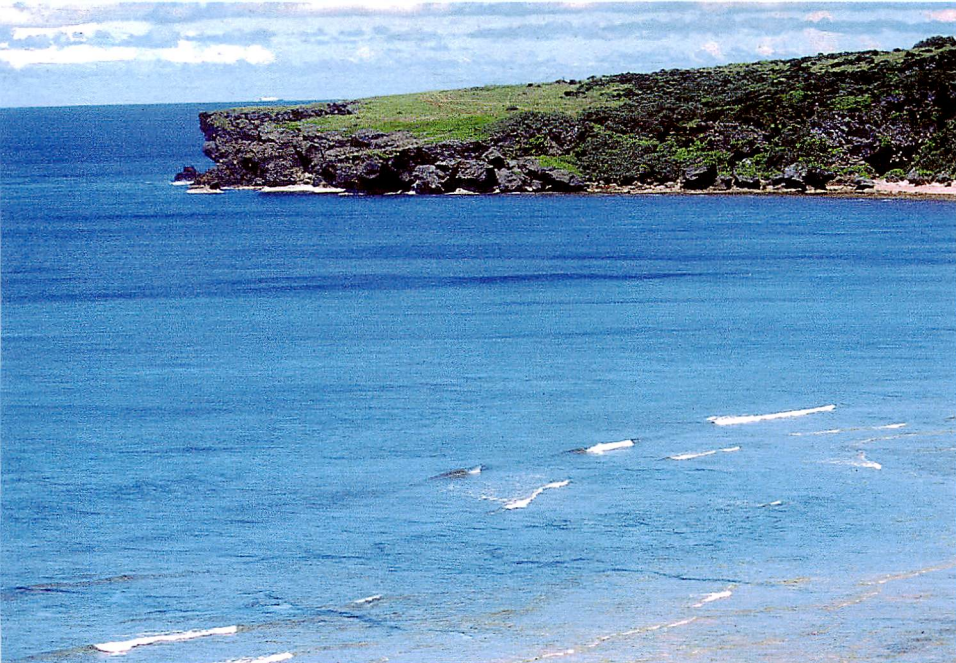
沖永良部島

田代啓一朗

(鹿児島県沖永良部農業改良普及所)

坂田祐介

(鹿児島大学農学部)



北西に面した島の海岸は、波に浸食されたサンゴ礁の奇岩が果てしなく続き、その岩間にある潮水を10mも空高く吹き上げる洞穴（フーチャ）がいたるところに見られる。テッポウユリは、このようなサンゴ礁の崖や崖近くに広がる草地に自生する。 ©和泊町

鹿児島島の南方542kmの洋上に浮かぶこの島は、周囲約50km、面積約95km²と、比較的小さく、その大部分が隆起サンゴ礁からなる。島には標高250mほどの山があり、山の周りには、カルスト地形に独特なドリーネが多数点在している。ドリーネを入り口にして鍾乳洞が地下に網目を拡げ、天の恵みの雨水を集める。そして洞内を流れる地下水は海辺で湧き水となり、島民の飲水や農業用水に使われるかたわら、程良く発達したサンゴ礁の海に流れ落ちる。この何の変哲もない島が、わが国でも有数の「自立した島」として変革を遂げた。そこには、痩せた土地に耐え、北西の風を好む「えらぶゆり」を手に、ほぼ1世紀にわたって島民たちが演じた「島興し」のドラマがある。

西郷隆盛が はぐくんだ島民性

1266年(文永3年)から約340年間、琉球王の統治下にあった沖永良部島は、1609年(慶長14年)、島津藩による琉球征服で薩摩に服属した。島はその後260年ちかく、1871年(明治4年)の廃藩置県まで、島津藩の奴隷的植民地政策に喘ぐことになる。藩の行った島政改革は、世にいう「砂糖地獄」に島民を陥れた陰湿過酷な仕打ちとして、今でも島に語り継がれる。

このような中、島にとって一つの重要な事件が起きた。それは、1862年(文久2年)、薩摩藩主島津久光の怒りにふれて西郷隆盛が島に流され、投獄されたことである。西郷は、流刑の地の沖永良部島にわずか2年間しか留まらなかった。しかしこの間、とくに島の若者たちに学問や政治を教え、道徳や倫理観を植えつけるなどして、島民たちの「自立」を、間接的ではあるが、支援した。

土持政照(1834年生まれ)は、西郷隆盛入牢時の間切横目(現^{まざりよこめ}在の警察署長)で、後の1864年

(元治元年)、島の余人(現在の町長)を務めた。彼は、牢獄から座敷牢へ西郷を移し、身の回りの世話をするかたわら西郷と深く関わっている。土持は、「選^{よひと}で、選^{いら}ばらぬ、沖永良部島(すばらしい沖永良部島)」を創るには、何よりも学問が大切と悟り、これから育てていく子供の教育に、幼時、彼が鹿児島^{いら}島の地で学んだ「郷中教育」が最適と考え、郷中教育の師と仰がれ、敬愛する西郷に教育を嘆願した。西郷は願いを快く引き受け、20名あまりの少年たちに教育を行い、彼らに島の将来を託して、島を離れた。

西郷隆盛はまた、頻繁に台風に襲われ、干ばつに見舞われる島の状況を見て、中国では宋時代に実践された社倉法^{しゃそうほう}の例を持ち出し、土持政照に、飢饉や飢餓から逃れる方策を示した。それは、平年作の年には米や麦、粟などの穀物を島民から供出してもらい、社倉に蓄えておいたものを、飢餓の年には少し利子を付けて貸し付けるやり方である。社倉法は1870年(明治3年)、土持の手で実施され、奄美群島の島々に蒸気船が寄港し大量の物資輸送が可能になる1899年(明治24年)まで続いた。この間、島民が培った勤勉性、儉約性、貯

蓄性の気風は、島民の性格を良く伝えるものとして、現在もなお沖永良部島に生き続けている。

西郷隆盛の教育を受けた少年たちの中に、操 坦勁（1847年生まれ）がいた。1887年（明治20年）、知名村ほか17か村の戸長（現在の村長）になり、1908年（明治41年）には、島嶼町村制（沖永良部島は知名村と和泊村の2村となる）が実施されたのに伴い、知名村の村長に任ぜられた。彼は、西郷の言う「一家和合の道は、ただ欲を去ること」を座右の銘として、

港湾や灌漑、道路整備など、私財を投じて多くの事業を行った。また、小学校の設備を充実し、縁故ゆかりの無い書生にも餞別を与え、遠くから高等小学校へ通学する子弟を下宿させてたりしている。特筆すべきは、老人を自宅に招き長寿を祝っており、これが島の敬老会の始まりといわれる。

土持政照にしても、あるいは操坦勁にしても、地方行政の長として示した「島興し」の想いは、島民に深く浸透し、このことが、沖永良部島を自立へと導いた。

島の自然と島人が つくりあげた 「えらぶゆり」

テッポウユリ（学名 *Lilium longiflorum*）は、屋久島から以南、八重山諸島にかけて広く自生する。このユリは、古生層の島から隆起サンゴ礁の島まで、あらゆる自然環境にも強い適応性がある。古生層の島では、海水が洗う岸壁や傾斜地に、また、隆起サンゴ礁の

島では、海辺の草地や他の植物が育たない崖に根を伸ばし、花を咲かせる。

このユリが、1870～1980年代に万国博覧会などを通じて欧州に紹介されると、純白の花の清楚さは称賛を浴び、「イースターリリー」と呼ばれ、純潔の象徴としてキリスト教の行事に大量に使われた。こうして早くも欧米へユリ球根の輸出が始まったが、1899年（明治32年）、海難に遭ったイギリスのユリ商人アイザック・バンティングが沖永良部島に上陸し、サトウキビに代わる換金作物としてユリ

球根栽培を奨めたことも、球根輸出を後押しした。その後、第一次世界大戦、ウイルスによる球根汚染、過剰生産、百合同業組合の内紛、あるいは第二次世界大戦など、紆余曲折はあったが、ユリ球根の生産と輸出は現在まで連綿として続き、絶えたことはない。

テッポウユリの自然の開花期は、沖縄南部で3月下旬、沖永良部島で4月上旬～下旬、また、東京付近で6月中旬である。わが国で

は、この時期には切花が多く出回り、1本当たりの単価は安い。そこで、単価の高い11月から翌年3月にかけて切花を出荷したいのだが、春から夏にかけて咲く花を冬に咲かせるには、それなりの栽培技術が必要だ。この技術を促成栽培という。ユリの促成栽培では、できるだけ早い時期に「充実した球根」を手に入れ、低温を与えるなどの処理をして植えつける。欧米でも4月のイースターに花を



昭和39年7月、和泊港岸壁に客室船「あけぼの丸」(610トン)が初めて接岸した。これまでの舢(はしけ)による積み荷の煩わしさは、これで解消された。その後昭和45年には1,500トン級、また昭和49年には6,000トン級の船舶が接岸するようになり、球根の積み出し(写真左上)は、大幅に改善された。©和泊町

間にあわせるには、同じように早い時期に球根を手に入れている。

沖永良部島の年平均気温は22℃前後である。とくに12月から翌年3月の冬期の平均気温は17℃と、温暖だ。テッポウユリの生育適温は15～25℃なので、島の気候はユリ生産に良く合っている。このことは、島以外の生産地より球根を1か月以上も「早く収穫できる」という有利さを島にもたらした。また、隆起サンゴ礁が風化した土壌は重く粘土質で、「しまりの良い」充実した球根が出来る。こうして、沖永良部島産球根は促成切花栽培

に最適という評価を受け、他の追随を許さない。

充実した球根を早く収穫し、出荷するために、島内外の多くの知恵と努力が結集された。輸出に適した品種の導入育種、欧米が要求するウイルスフリーの球根生産、あるいは出荷調整や輸送の合理化など、町や県の行政組織の後押しを得て生産出荷体制を確立している。例えば、品種「ひのもと」や「ジョージア」を導入したことや、無病球根生産に「親子りん片繁殖法」を考案し実施したことなど、評価は高い。



整備された和泊港と、市街地を取り囲むように広がる球根や切花の生産圃場。和泊町の耕地の割合は62%ときわめて高く、その71%が基盤整備されている。 ©和泊町



球根生産のためのユリ栽培は、サトウキビの枯葉をすき込んだ痩せた赤土で行われる。「しまりの良い」球根が出来るのはこのためである。 ©田代啓一郎

島では、6月上旬から7月上旬の1カ月間が球根の収穫期である。これより早いと発芽しない球根になる。古い茎と葉を切り離し、1個ずつコンテナに入れる。収穫した球根をコンテナごと殺菌剤に浸け、集荷場に運び込む。

©和泊町



球根生産から 切花と野菜生産へ

和泊町が切花生産を始めたのは、1973年(昭和48年)頃からである。当時、わが国は石油価格の高騰で、諸産業界は急激なコスト高に見舞われていた。このことが、亜熱帯の温暖な気候を活かして切花を島で作ってみようとする引きがねになった。また当時は、

「連作」のためユリ球根は腐敗病やウイルス病などでひどく品質を低下させていた。あるいは、欧米でもテッポウユリ球根が生産されるようになったことや、欧米への球根輸出は、イースター用に限られていたことから、輸出量は落ち込み、以前のような収入が得られなくなっていた。

このような状況の中、1977年(昭和52年)9月、猛烈な台風が島を襲った。瞬間最大風速80m/s以上、気圧も観測史上最悪の907mbを

記録したこの台風は、島の民家約5千戸の8割を破壊し、その復旧に、農家だけでも約98億円の借金を負担させた。この台風襲来は、球根主体の生産から切花へと、生産品目の転作を促す直接のきっかけになった。当時、「球根より切花の方が収益性ははるかに高かったので、切花生産で復旧費を稼ぐことにした」と、生産農家はいう。さらに、切花への転作に追い打ちをかけたのは国際化の急進展である。1985年(昭和60年)のプラザ合意をきっかけに、急速に、円高と農産物の市場開放が進み、ユリ球根輸出は打撃を受けた。こうして、テッポウユリ球根生産は、緩やかではあるが、確実に減少していった。

沖永良部島の花き栽培は、明治期に、島に自生していたテッポウユリ球根を栽培したことに始まった。他の作物を含めて第二次大戦後の島の農業の流れを見ると、まず、1960年代までの、ユリ球根とサトウキビ生産が挙げられる。1970年代には、ユリ球根とサトウキビ生産は本格的になり、水稻の生産は逆に激減し、水田はほぼ畑地化した。次いで、ユリ球根とサトウキビ生産から、切花と野菜生産

への転換がはかられた1980年代である。切花はグラジオラスが主体で、野菜は里芋と馬鈴薯が多く作られた。1990年代に入ると、切花生産は大幅に拡大し、新たに、キクやユリ、ソリタゴなどが加わった。

このような島の農業の流れの中で、耕地の利用形態で重要な変化が起こった。それは、球根とサトウキビは露地で作られるのに対し、切花は施設で栽培されたことである。1980年代初めの露地から施設栽培への転換は、この時期を境にして、「輪作」という栽培形態が崩れたことを意味している。つまり、施設を建て、定まった土地に毎年同じ切花を作る連作形態に変わったのである。このことが原因で、沖永良部島はその後、環境保全に関わる極めて厄介な問題を抱えることになる。

環境汚染という 試練をかかえて

沖永良部島の水について、硝酸態窒素と農薬の分析を三重大学が行っている。1994年(平成7年)の報告書によれば、林が残っている場所の水源の窒素濃度はほぼゼロで、問題ないが、畑に囲まれた水源の濃度は2～3ppmで、中には6ppmを越すものがあるという。また、井戸水と湧き水の場合、環境基準値の10ppmを越すものが8か所、5～10ppmが20か所もあり、このような高濃度の硝酸態窒素蓄積の原因を、圃場に使われる化学肥料と警告している。高濃度の水源からは、現在取水されていない。しかし、畑地が増え施設栽培化が進めば、近い将来には水質汚染は必ず拡がる可能性がある。

農薬については、地下水の調査で34地点中9地点で、また、側溝や海への排水の分析では13標本中9標本で、いずれも0.1ppb以上、最高で3.3ppbが検出された。水道水の安全基準は5ppb以下なので、まだまだ安全と思うか否かは島民が判断することである。

和泊町内の農薬使用量は、耕地面積当たりでは63kg/haと、全国レベルとほぼ同じだ。しかし、耕地割合は島の面積の47%と高いので、総面積当たりは31kg/haと、全国使用水準の2.6倍に達する。花の栽培ではサトウキビの10倍近い農薬を使うのが普通なので、この値はなにも驚くべきものではない。例えば、一般の農薬散布では、キャプタンなどの殺菌剤は1000～2000倍に薄めて使うのに対し、球根や馬鈴薯種芋を農薬に浸けて殺菌する場合、農薬はかなり高濃度の100～200倍に薄めたものを使う。ところが、赤土にまみれた球根や種芋を薬液に浸けると、数回で薬液は汚れる。そこで、薬液を栽培圃場や道路、側溝などに捨てることになる。切花栽培の場合も同じで、食物でないので頻りに農薬散布される。しかし、圃場に大量に投入された化学肥料や農薬は地下水に溶け込み、側溝に捨てられた農薬は直接海に流れ出す。このような悪循環が島と海を汚し、島民と海の生物を蝕んでいく。

1994年(平成7年)、和泊町は化学肥料や農薬の投入量を、2000年までに約20%削減する方針を打ち出した。また、1996年(平

成8年)には「農薬廃液処理施設」、1997年(平成9年)には「えらぶ堆肥センター」、1999年(平成11年)には「廃ビニール処理施設」を建設して、環境汚染防止に努めている。これらの行政的措置は、かなりのを得ている。しかし、例えば化学

肥料を減らした分だけ、有機質肥料を増やしても、窒素の総投入量は減らないという事実を、行政はどのように受け止め、どのように対処するのだろうか。

切花生産と流通にみる 沖永良部の現象

沖永良部島は、そもそもユリ球根の産地であった。明治末に野生ユリ栽培が始まり、ほぼ100年が過ぎている。第二次大戦後の1949年(昭和24年)、島にユリ球根を扱う「永良部ユリ根出荷組合」が設立され、その後、フリージア球根も生産されるようになったので、名称を「永良部百合フリージア生産出荷組合」と改めている。

これに対し切花は、1970年代半ばに和泊町で生産が始まり、1981年(昭和56年)、出荷を取扱う「えらぶ花き園芸組合」が設立された。一方、和泊農協(現在のJA和泊)でも、組合員が切花生産を始めた

ので、その出荷を取扱っていた。こうして、えらぶ花き園芸組合と和泊農協の、二つの切花出荷組織が和泊町に存在することになった。しかし、これら二つの出荷組織を一本化しようという気運が高まり、1990年(平成2年)、「沖永良部花き流通センター」が誕生した。

和泊町の農家から花き流通センターに集荷され、全国の市場に出荷される切花の販売額は、確実に伸びていくはずであった。確かに、町全体の販売額は、1990年(平成2年)度の約18.5億円から1996年(平成8年)度の約31.5億円へと、1.7倍に伸びている。花き流通センターでも同じ伸びを期待していた。ところが、平成3年度までは約3,400万円にすぎなかった「個人が直接市場に出荷」する切花販売額が、平成8年度には約6億円にまで増えており、さらに、平成8年度

には、JA 和泊が集荷と出荷の取扱いを再開していた。つまり、花き流通センターの切花販売の割合は、設立当初98%あったが、平成8年度には約76%に下がっていた。こうして現在、切花をめぐる、一つの町に三つの出荷システムが存在するようになった。これはとてもユニークな沖永良部島ならではの現象だ。

「沖永良部花き流通センター」は、切花生産の情報収集や情報提供の拠点となっていて、出荷予約システムで、全国130あまりの市場に計画的出荷が可能だ。切花生産農家は、花き流通センターが、生産から販売までを担う中心的組織として、また、島が全国に名だたる切花生産地として成長するうえで、大きな役割を果たしていることを十分すぎるほど承知している。しかし、花き流通センター離れが少しずつ広がっているのは、生産者個々人の栽培技術や努力の差が価格に反映され



島の町営実験農場に咲き誇るテッポウユリ。ここでは、ユリを始めとする花の優良種苗の供給や優良品種の普及を図るかわら、栽培技術研修や経営指導など、「人づくり」も行っている。©和泊町

ない場合や、販売価格が個人出荷やJA 和泊取り扱いより低い場合のあること、あるいは、出荷コストがややかかることなど、自立している島民の生産意欲を、削いでいるのかもしれない。